



A TREASURY OF WORLD LITERATURE

世界の文学

54

ドイツ名作集

中央公論社

世界の文学 54

©1967

ドイツ名作集

訳者 斎藤栄治他

Illustrations :

Originally Copyrighted by Gunter Böhmer

昭和42年5月10日初版発行

昭和42年12月1日再版発行

価 430 円

発行者 山越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 東京プロセス株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

ノヴァーリス	
アトランティス物語	7
クライスト	
サント・ドミンゴ島の婚約	23
ホフマン	
スキュデリー嬢	53
ブレントナーノ	
カスペルルとアンネルル	116

ゴットヘルフ

黒い蜘蛛

162

C・F・マイヤー

説教壇から撃つ

244

ラーベ

黒い船

287

ハインリヒ・マン

ブランツィルラ

333

ホーフマンスタール

バソンピエール元帥の体験

373

ツックマイヤー

クリスマスの夜

383

ブ
レ
ヒ
ト

実
験

ノ
サ
ツ
ク

岸
辺
で

シ
ャ
ー
パ
ー

罪
な
ぎ
罪

解
説

487

440

419

408

ドイツ名作集

アトランティス物語

ノヴァーリス
高橋英夫訳

さる年老いた国王が、華やかな宮廷をいとなんでいた。王の生活の榮耀榮華にあずかるうとして、いたるところからあまねく人びとが押し寄せてきた。来る日も来る日も、その饗宴にはあり余るばかり口をみたす珍味嘉肴や音楽、きらびやかな飾りの具や衣裳、さらには入れ替わり立ち替わりの見世物や慰みごとの欠けることはなかったが、また、気の利いた家具調度もしつらえられてあれば、明敏で人好きのする博識の語部たちの物語の娛しみ、活気にも事欠かなかった。そして若くみやびやかな男の子ら、乙女らこそ、心たのしい祝宴のまことの心をなしていた。年老いた国王はつね日頃謹直でいかめしい人であつたが、彼には二つの嗜好があつて、それがこのように絢爛たる宮居をするに至つたまことのきつかけ

でもあり、またかくもみごとなしつらえを施す因ともなつたのである。その一つは、はやくこの世を去つた王妃の忘れ形見として、また言うに言われぬ愛ずらしい乙女子として、王にとつて限りなく貴いものであつた王女に對する慈しみである。この王女のためには、自然のありとある宝物をもとめ、人智の総力をつくしても、この地上界に一つの極楽郷をこしらえてやりたいと国王は願つていた。もう一つは、詩歌のわざと詩歌の名匠に對する、まことの熱意である。国王は若いころから、詩人たちの作物を心から愉しみ読んでいて、あらゆる言語でうたわれた詩を蒐集するのには、熱心な努力と巨額の費えをふり向けることを惜しまなかつたし、まえまえから歌びとの交わりを何ごとにもまして尊重していた。この世のあらゆる際から、王は歌びとをその宮廷に招き寄せては、彼らにさまざまの榮譽を積み授けていた。王は彼らの歌に耳をすますのに飽くことを知らず、心を奪う新しい歌を聴いたあまりに、きわめて重大な用件を失念してしまふこともしばしばあつたが、そればかりか、生活上かかせない事がらまでも、忘れてしまふのであつた。王女は、歌のもとに生い立って、その魂のすべては一つの優しき歌となり、愁いと憧れの天真爛漫な表現となつた。かかる王君の庇護をうけて、誉れにかがやく詩人たちの薰陶感化は、全国にゆきわたつたが、なんといつてもそれは

宮廷にいちじるしかった。人びとはさながらまれなる美酒をちびりちびり味わうのに似て、この世の命を悠然と享け楽しんでいた。いとわしく憎むべきかずかずの情念は、すべての人の心情にゆきわたった温雅な、調和ある氣韻によって、ことごとく不協和音のように逐いやられてしまったが、それだけに、生活を味わう快い満足の念にもひとしお淨らかなものがあつた。魂の平安と、おのずと創りなされた幸福な世界の、内なる、清淨な觀照、それがこの妙なる時代の所有となつてしまえば、分裂抗争などはただ人類のすぎし日々の仇として、詩人たちの古き口碑のうちに歌われるものでしかなかつたのである。こうして、歌の精霊がその庇護者にささげることのできる、感謝の愛らしいしるしとしては、この王の息女にしくものはなにかに見えた。王女は、いともまどやかな人間の想像の力だけが、こうした一人のやさしい乙女の姿に纏めあげることができるような、ありとある資質を具身していたのである。愉しい祝祭のおりおり、王女がかがやく純白の衣裳をまとい、はなやいだ遊び友だちの群れに立ち交わり、興奮に激した歌びとたちの歌合戦にふかく耳傾けて聴き入っているありさま、あるいは顔の色を染めながら、賞をわがものにした歌の作者である幸福な歌びとの捲髪に、馥郁たる花冠を授けかぶせたりするありさまを目に見た人は、王女こそあの歌が呪文とな

つて目のあたりに喚びだした壮麗な芸術の精なのだと思ひ、詩人たちの言葉の上にかぶさまさまの魅惑や旋律を讀めることもやめてしまふほどであつた。

とは言へ、現し世のこの樂園の只中にも、ある神秘的な運命がただよっているように見えた。この国の住民のただ一つの心懸りというのは、花咲く王女の婚禮のことであつた。この幸福な時の世の永続も、国全体の宿運も、それにかかつていた。国王はしだいに齡を重ねていた。

王その人にとつても、この心懸りが胸に宿っているように見えたものの、といつて万人の願ひにかなうような王女の婚儀の見込みは立たなかつた。王室に対する神聖な畏懼の念からいつて、王女をわがものにしようと考えたりするのは、家臣の身として、とうていありうべからざることであつた。王女は地上のものを超えた存在と思われていて、王女を求めようと念願かけてこの宮廷に姿を現わした異邦の王子たちも、すべて王女よりもはるか下風に見下されたので、国王や王女が、それら王子たちのだれか一人に目をとめるであらうと思うものもいなくなつた。事実また、こういう身分格式の隔たりの感情は、だんだんと王子たちをみな遠ざけてしまふことにもなつたのである。そしてこの王室が度はずれに傲つていふ風評がひろまつて、ほかの人びとにも、自分まで同じような辱しめにあいたくはないという氣持をおこさせた

らしかった。實際、この評判はまったく根も葉もないわけではなかった。国王はまことに温厚な気性の人ではあったが、ほとんどそれと知らずに、ある優越感にひたっていたため、わが息女を身分階層のより低い、素姓のあいまいな男とめあわせるといふ考えなどは、とうていありえないこと、または忍びがたいことだったのである。

王女の気高い、類いまれな価値が、王の心のなかでその感情をしいにかためさせたのである。国王ははるか過ぎし昔の、東洋の王家の出であつた。王妃はかの名高い英傑ルスタンの後裔の、そのまた最後の裔であつた。王に仕える詩人たちは、過ぎし世の超人的な世界の支配者と主君とのえにしを、いつもいつも王の前で誦よみっていた。こうして、芸術という彼らの魔法の鏡のなかには、王の血筋と他の人間の祖先の懸隔が、王の家系の榮光が、いよいよ明らかに映しだされたので、国王はただ詩人という高貴な階層を通じてのみ、自分と他の人間のあいだのつながりが保たれているように思ひなしたのである。王は、妙齡に達した息女の心、王国の現状、それに年ごとに加わる自らの齡から思へば、どの点からしても王女の婚姻がまことに願わしいと感じて、第二のルスタンを切実に望み求めたのだつたが、それも徒勞であつた。

都からはど遠からぬあたりとは言へ、さる鄙ひんびた家屋敷に、一人の翁おきなが住まつていた。翁はひたすらその一人

むすこの教育にたずさわりながらも、かたわら農夫たちが重い病にかかるなどすれば、助言を与えたりしていた。むすこはまじめな若者で、幼いころから父が教えてくれた自然の學問だけに、もっぱら打ち込んでいた。この翁は何年かまえに、はるかな国から、この平和な、榮える国へと引き移ってきた者で、国王がこのあたり一帯にひろめた恵みある平安を、静かな日々のうちに享けては、満ちたりていた。彼はこの閑居を利して、自然のもろもろの力を探つては、それら魅惑的なかずかずの知識をむすこにつたえていたが、これに対して、むすこがすぐれた理解を示せば、自然もまた、むすこのふかい心情には、自らのもろもろの秘義をすすんで打ち明けてきた。若者の容姿は、その高貴な顔だちの翳かげりある造りと、人なみならぬ澄んだ目の光を感じとるすぐれた感覚を持ち合わせない者には、ありきたりで、目立つところがないように見えはした。しかし長く見つづけるにつれて、この若者はいよいよ魅力を増してゆくのであつた。よく透る、穏やかな声音とともに、その品のよい天稟が語りだすのを聞けば、もうほとんど彼から離れられなくなるのだった。王女の遊園は、小さな谷あいにあるこの翁の家屋敷をおおいつつむ森に接していたが、ある日のこと、王女はひとり馬を駆つて森におもむき、そこで何にも妨げられることなく、空想に思いふけつたり、美しい歌をくり

かえし歌ったりしたい、と思ひ立つたのである。丈高い樹々の爽涼にいざなわれて、ずんずんと陰なす奥手へ進んでゆくうち、王女はついに、翁がむすこといっしょに暮らしている家屋敷のところまで来てしまった。王女は牛乳が飲みたくなつたので、馬からおりて一本の木に馬をつなぎ、一杯の牛乳を請おうと家のなかに入つていった。その場に居合わせたのはむすこである。王女は青春と美のあらゆる魅力に装われ、そのこまやかで無垢な、高貴な魂は言ひようもなく人の心を惹くほど澄みわたつて、ほとんど女神の姿かと見えたのだつたが、むすこは氣品ある婦人が、こうして魔法のように出現したのに、ほとほと驚くほかはなかつた。彼が急ぎ立ち上がつて、精霊の歌さながらに響く王女の願いごとをかなえようとすれば、一方老人はうやうやしく恐れ畏みながら王女に歩み寄つて、家の中央にある簡素な暖炉のそばに席を占めるよう招じ入れた。そこには軽く青い炎が、音もなくちらちら揺れながら燃えていた。家のなかに進んだとき、すぐ王女の目についたのは、家の内部があまたの珍奇な品々で飾られていて、全体に秩序と清潔がただよい、まれに見る淨らかさを示しているその場の感じであつた。そしてこの印象は、質素な服をまとつたうやうやしい老人と、むすこの節度ある礼儀正しさによつて、いっそう高められた。老人はすぐさま王女を、宮廷に属する一人

と見てとつたが、それも彼女の豪華な衣裳、氣位ある物腰が老人にそう思わせて余りあつたからである。むすこがまだ戻つてこないあいだ、王女はとりわけて目に留まつた二、三の珍しい品々について、老人に問ひたしたが、そのなかには、特に暖炉の王女の席の横に掛けられた、数枚の風変わりな古い絵もあつた。喜んだ老人は、愛想よく、王女にそれらの絵について話してきかせた。いくばくもなく、むすこは新鮮な牛乳を満した壺を持つて戻り、少しも巧まない、うやうやしい態度で、王女にそれをすすめた。父子二人としばし愉しく語りあつたあと、王女は、心のこもつたもてなしに対するお礼をいとも愛らしく述べ、また顔を赤らめながら、もう一度ここを訪れて多くの珍しい品々についての有益な話を楽しませていただけるだろうか、と老人に許しを乞ひ、それから馬を驅つて帰つていったが、父子が自分の素姓に氣づいていないのがわかつたので、身分を明かすことはしなかつた。都のすぐ近くに暮らしながら、この二人は自分たちの探究に没頭してゐたために、人間の雑沓を避けようとしていて、むすこが宮廷の祝宴につらなろうという氣を起こすことも、絶えてなかつたのである。ことに彼が父のそばを離れるにしても、せいぜい一時間どまりなのが常で、それもとときおり森のなかに分け入つて、蝶や甲虫や植物を採しまわつたり、物言わぬ自然の精霊

の啓示を、外界にあらわれたその多様な愛らしい姿を通じて、聴きとろうとするときだけであった。翁にとつても、王女にとつても、また若者にとつても、何程のこともないこの日の出来事が同じように重大事であった。

翁は、見知らぬ婦人がむすこの上に、新しい、深い印象をのこしたのを、たやすく認めることができた。彼はむすこを十分よく知っていたから、どのようなものであれ深い印象を受けとれば、それがむすこの生涯にわたつて忘れがたいものになるだろう、とよくわかつたのである。青春という齡とむすこの心ばえとは、こういう類いののはじめでの感情を、抑えがたない愛慕に変えてしまわずにはおかなかつたのである。翁はまえまえからこういう出来事が近づきつつあるのを、予見していた。この忽然と現われた気高くも愛らしい姿は、知らず知らずのうちに、彼の心にも切々とした関心を起こさせたが、ものを信ずるに厚い翁の心情は、はからずも起こつたこのことの今後の成行きについて、何ひとつ心配し憂えるところがなかった。王女にしても、馬足をゆるめながら家路をたどつていったときに覺えた感情は、ついぞそれに似た状態を憶い出せないような感情であつた。目の前にはある新しい世界が浮かび、その明と暗が相半ばする、妖しくたゆたう感覺があるばかりで、王女の心のなかには、何ひとつまとまつた考えが浮かんで来なかつた。魔法のヴ

エールが大ききひだを打って、彼女の澄んだ意識をつつみ、拡がつていった。そのヴェールを上に掲げてみれば、王女はさながら、自分がこの世を超えた天上界にいるような思いがしたかもしれない。これまで王女の魂をすみずみまで占めていた詩歌に対する思い出は、不思議な、なつかしい夢と、すぎ去つた時の世を結び合わせるはるか昔の歌になつてしまつたのである。御殿に戻つてみれば、王女は宮居の壮麗と、その賑わしい生活にほとんど驚くばかりだつたが、父である国王に喜び迎えられたとき、驚きはさらに大きくなつた。父の顔が、生まれてはじめて、彼女の心のなかに畏怖の氣持を起こさせたのである。自分の冒険については、すべて黙つて言わないでおくことが何としても必要であると思われた。人びとはものに思いふけているときの王女の深沈とした様子とか、何か空想したりじつと考えこんでいるときの心もそらな瞳には、つとに慣れていたもので、そこに何か只ならぬものがあると感づくこともなかつた。王女は今となつてはもはや、まえのような愉しい気分にはなれなかつた。全くの異邦人ばかりのなかにいるような思いがして、何やら奇異な不安がその日の暮がたまで、彼女の胸にまといつてはなれなかつた。けれども宵に入つて、希望をたたえる詩人のあかるい歌が、人びとのもろもろの願ひの実現を信ずる信仰の奇蹟を、感激をこめてうたい、彼

女の心を魅了したときには、王女は甘い慰藉にみたされて、たいそう愉しい夢のなかに揺られていったのだった。一方、若者は彼女と別れるとすぐに森に分け入って姿を消してしまった。彼は道にそった茂みのなかを、宮殿の庭園の門まで、王女のあとからつけてゆき、それからまた、同じ茂みを引きかえしてきたのである。彼はそうして歩いているうち、足もとに明るく耀かがやいているものを一つ見つけた。そのほかに身をかがめて拾い上げてみると、それは深紅の石で、片面は不思議な閃光を放っていたが、反対の面には、読み解くことのできない符牒が刻みこんであつた。彼はその石を貴重な柘榴石ざくろいしだと見分けたが、あの見知らぬ婦人の首飾りのまんなかになんかがついてゐるのを見たように思った。あの婦人がまだ家にいるとでも言うように、彼は飛ぶような足取りで家にとつてかえし、宝石を父に渡したのである。二人は相談のうえ、明くる日の朝、むすこが同じ道を引き返して、この宝石を探しに来るかもしれないのを待ち受けてみることにした。こうすれば、彼女にそれを返すことができるであろう。また、もし探しに来なければ、あの婦人がもう一度訪れて来るときまで宝石を保管しておいて、直接そのひとに手渡そうということになった。若者は、ほとんど一晩じゅう、その柘榴石をながめあかしたのであつたが、暁方近く、宝石をくるんだ紙片の上に、いくつかの文句を書

き留めてみたいという、抗あらがいがたい欲求をおぼえた。だが彼がそれを書き留めたとき、心に何を考えていたのか、それは彼自身にも、はつきりとはわかつていなかった。

神秘解くべからざる徴しが一つ ふかく

この宝石の熾える血のいろに 彫りこんである。

かの見知らぬおみな姿をとどめた

わが胸のうちも この宝石に比しえよう。

宝石をめぐつて 数さえ知れぬ閃光は走り

またおみな姿をめぐつて 明るい潮の波がしら立つ。

かの宝石のなかに 光彩が埋れたごとく

このおみな姿も 心の心を持つてあろうか？

夜が明けるが早いか、彼はもう道をたどつて、庭園の門へと急ぎ出掛けていった。

一方、王女は夜になって衣服をぬいだとき、首飾りについてゐた大事な宝石が紛失しているのに心付いた。それは母のかたみの品であるばかりか、それを所持していれば、自らの意志に反して他人に力づくで支配されるようなことも起こらず、わが身の自由を保つことができるので、護符ともなつていたのである。

この宝石の紛失したことに、王女は驚くというよりは、

むしろ訝^{いよ}しさを覚えた。昨日の遠乗りするときには、まだそれを身につけていたことが思い出された。そこであの老人の家のなかか、それとも帰り道の森のなかか、そのどちらかで失くしたのにちがいない、と彼女はかたく信じた。その道はまだ記憶のなかにあざやかに残っていたから、王女は、すぐ次の日、朝まだきにあの宝石を探しに出かけようと心に決めた。こう思うと気持もすっきり晴れ晴れとしてきた。この紛失をきっかけとしてまたすぐにあの道を往くことができるのだから、王女の様子は、まるで紛失を少しも不愉快には思っていないかのようになさへ見えた。夜の明けるとともに、彼女は庭園を歩いて森へ出かけていった。いつもよりせわしく急ぎ足に歩いていたので、彼女は心臓がはげしく動悸をうち、胸がつまってくるのも、まことに当たりまえのことに思っていた。折りしも太陽が、年古りた樹々の梢を、黄金色に染めはじめると、梢はいっせいに太陽に挨拶しようとして、お互いの夜の顔を醒まそうとでもするように、しずかにささやき合ひながらそよいだ。そのとき、はるかな物音に誘われて、王女が背後の道をかえりみると、そこにあるのが自分^ののほうをめざして急いでやって来るのが見えたのである。その同じ瞬間、若者もやはり王女に気がついた。

縛^{ゆわ}められたように、彼はしばし立ちどまった。いわば、

王女の出現は現実のことであって、決して錯覚などではないのだと、確かめようとするかのように、彼はまじまじと王女をみつめた。彼らは喜びをひかえめな態度にあらわして挨拶をかわしたが、その様子は、二人がもう長いあいだの知合いで、互いに愛し合っている仲のようであった。王女が朝まだきの散歩のわけを、彼に打ち明けもしないうちに、若者はいち早く、あの宝石を、顔を赤らめ、胸をときめかせながら、文字を書きつらねた紙にくるんで王女に手渡した。王女は記された言葉の内容を感じとったようであった。彼女は黙って、震える手に石を受けとり、幸いにも発見してくれたそのお礼の代わりにと、自分の頸につるしていた黄金の鎖を、若者の首に懸けてやったが、それもほとんど無我夢中のうちだった。若者にはにかみながら王女の前にひざまずいたが、王女が父のことを尋ねたときも、しばらくは何ひとつ答えることができなかった。彼女は声をおとし、伏目のままで、彼に、近くまたお訪ねいたしようにと告げ、所蔵している珍しい品々についてお教えくださるという約束を、たいそううれしく受けさせていただきます、と語った。王女は若者に、もう一度なみなみならぬ真情をこめて感謝し、それから後をふりかえりもせずにはやくと引き返していった。若者は一語も発することができなかった。かしこまって身をかがめ、王女が木立の奥に姿を消

してゆくのを、ずっと見送っているばかりであつた。このことがあつて数日の後、王女の二度目の訪問があり、やがてそれに引きつづきたたびの訪問が重なるようになった。若者は人目につかぬままに、王女のこの散策のお伴をつとめた。彼は決められた時刻に、庭園まで王女を出迎えにいつては、またそこまで送ってきたのである。王女は、ほかのことではすっかりこの若者に打ち解けて、やがてその天国のように浄らかな心にかぶ考えは、彼に少しも隠さないようになったけれども、ただ己れの身分に關してばかりは、かたく沈黙を守つて破ることがなかった。いわば高貴の生まれであることが、王女にひそかな怖れを起こさせているかのようであつた。若者のほうでも、王女に全心全霊を捧げたことに変わりはない。父と子は、王女を宮廷の身分のある宮女と思つていた。王女は翁に娘のような情愛でなじんだが、翁をさまざまいたわるその態度こそ若者に対する愛の喜ばしい先触れであつた。彼女はすぐにこの不思議な家にすっかりなじんでしまつた。そして翁や、自分の足もとにすわっているむすくに、わがラウテの調べに合せて、この世のものとも思われぬ声で、心を魅する歌をいくつも歌つてきかせたり、若者にこの響きよい芸術を教えたりした。その一方で彼女は、熱のこもつた翁の唇から、いたるところに繰りひろげられている自然の秘儀のかずかずの解き

明かしを授けられたのである。老人は彼女に、世界が玄妙な共感というものによつて成り立つてゐることであるとか、星辰は相集まり相寄つて、なだらかな輪舞を舞っていることなどを、教えた。前世界の歴史が、翁の聖なる物語を通じて、彼女の心の前にひらかれていった。あるいは、彼女の音楽の弟子であるむすこが、靈感に溢れるや、ラウテを手にとり、信じられぬような理解の力を示して、いとも見事な歌をうたひだしたりすると、王女はどれほど恍惚としたことであらう。ある日のこと、王女と二人だけでいたとき、ことのほか大胆な感情の躍動が彼の魂をとらえた。そしてその日の帰りみち、つよい愛が王女の乙女らしい慎みをいっになく激しく超えてしまつたとき、二人は我を忘れてかたみに腕のなかに身を沈めて、はじめての燃える口づけが二人を永遠の融合のうちに引き入れたのだつたが、折から迫りくる夕闇とともに、はげしい嵐が樹々の梢の上で、突如として荒れくるいはじめた。ものすごい嵐雲が、ふかい夜の闇とともに、二人の頭上に襲いかかつてきた。若者はいそいでこの怖ろしい暴風雨とちぎれ飛ぶ樹々から、王女を安全なところに移そうとした。けれども夜のさなか、いとしいひとを思う心配のあまり道を誤つて、彼はますます森の奥ふかく、迷いこんでしまつた。自分のまちがいに気づくにつれて、さらに彼の不安はつのつた。王女は父の王